

春出荷用花壇苗の温床育苗における温度管理法

[研究のねらい]

ニチニチソウ等の春出荷用花壇苗の育苗は 1~2 月を中心とした真冬に行われますが、この時期の低温、特に発芽後の温度不足による生育不良が問題となっています。そこで、冬季における育苗において、発芽後も温度管理の適正化につとめることにより、花壇苗の安定生産を図ります。

[研究の成果]

- ①冬季の加温温室における気温とそこで育苗を行っているセルトレイ内の地温を比較した場合、夜間には地温は気温よりも 4℃程度低くなります(図 1)。このことから、発芽後も温床育苗によりセルトレイ内の地温を暖めてやることで苗の生育は良好となり、慣行育苗(発芽後の温床育苗なし)と比較して生育は促進され、成苗率(播種数のうち、正常に生育して鉢上げに至る苗の割合)が向上します(写真 1)。
- ②発芽後の温床育苗時には、セル内の地温が 18℃以上となるよう加温します(図 2)。
- ③温床育苗効果は、子葉展開から本葉 1 枚展開時(おおよそ播種後 2 週間~3 週間)まで加温することで安定します。

[成果の活用面・留意点]

- ①温床育苗により、成苗率の向上が認められるとともに生育の斉一性が高まり、安定した計画的な苗生産が行えます。

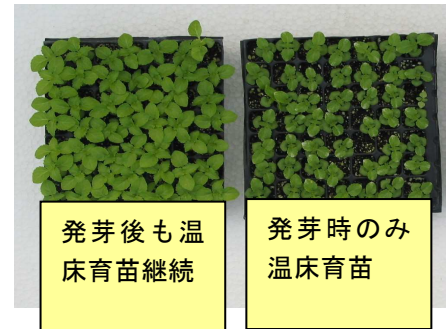
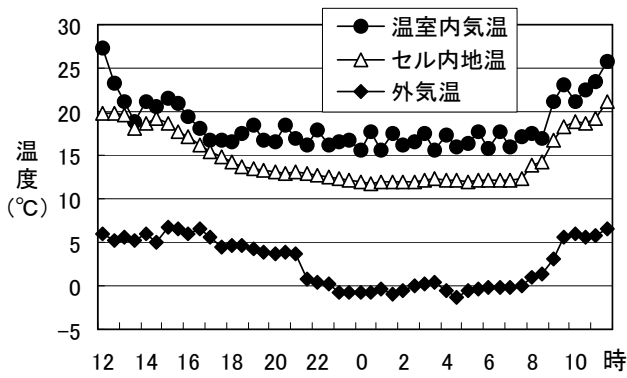


図 1 冬季における温室内気温とセルトレイ内地温の関係

写真 1 温床育苗の効果

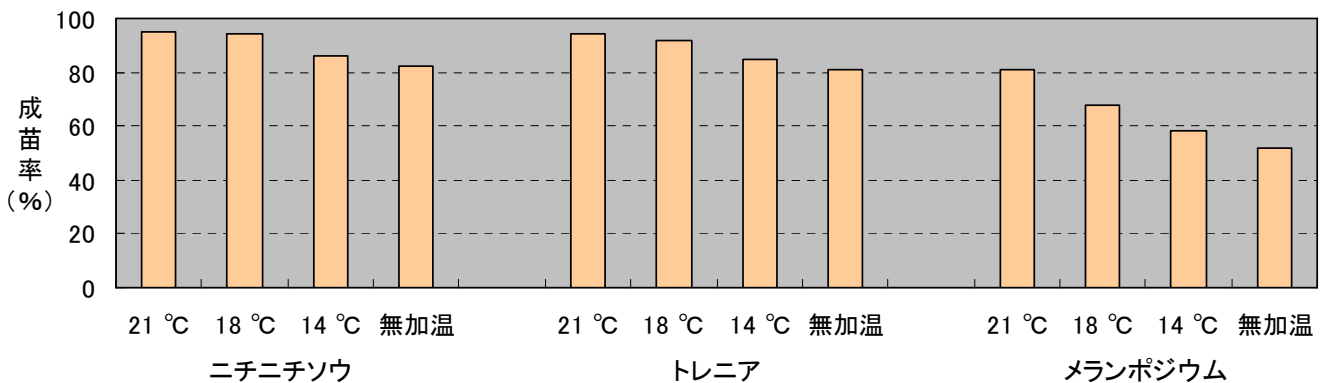


図 2 温床育苗時における発芽後の地温と成苗率

実施年度：平成 13~15 年度
担当者：島 浩二・妹尾明枝